

city&life

都市のしくみと暮らし

no.109

Nov-Feb 2013-2014



瀬戸内文化の再生——
爺さま、婆さまを元気にする芸術祭

特集

巻頭言

「アート」を手段に、島を、人を元気にする

瀬戸内海は、1934年に日本で最初に指定された国立公園だ。穏やかな内海に、幾多の島々が浮かぶその風景は、古より、多くの人々に愛されてきた。

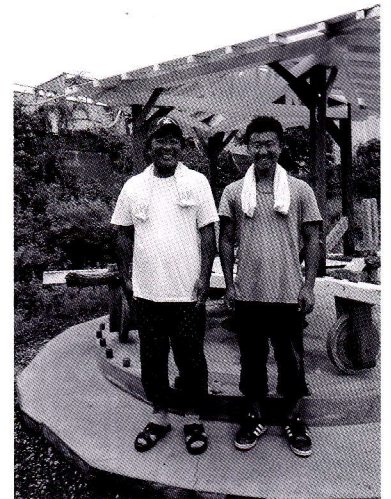
しかし、近代化や戦後の高度成長期、島々は負の遺産を背負わされてきた。亜硫酸ガスを排出する精錬所や産業廃棄物の不法投棄の場所となり、島の自然環境、そして自然と共にあった人々の生業は失われていった。人口は減少し、暮らす人々の高齢化も進んだ。

そんな島々で2010年、3年に1度開催されるトリエンナーレとして、「瀬戸内国際芸術祭」が始まった。今年はその第2回目。春、夏、秋の会期中、合計108日間に、約107万人もが瀬戸内の島々を訪れ、アートを楽しんだ。

だが、芸術祭の核心は、一過性のイベントではない点にある。ここではアーティストが、建築家が、ボランティアが、観光客さえ、まちおこしのメンバーとなる。そうした人々が、島の人々と一体となって、島を元気にしようと汗を流す。

島々には、固有の歴史、民俗、文化が息づいている。それぞれの個性を大切にしながら、少しずつ、島をよい方向へと導いていく。アートを手段とした、まちおこしへの挑戦。

今号では、「瀬戸内国際芸術祭」に焦点をあてながら、まちおこしのあるべき姿を考える。 (編集部)



表紙——伊吹島。島民・川端康夫さん(左)と、
アーティスト・金泰範さん
裏表紙—男木島。アーサー・ファン「光の家」
photo:佐藤真(関連記事:p8)

特集

瀬戸内文化の再生——

爺さま、婆さまを元気にする芸術祭

contents

対談	海の復権—— ^{アーキペラゴ} 多島海、人々の暮らし 北川フラム×陣内秀信	2
ルポ	島を巡る、暮らしに出会う	8
コラム	12の島——風土・生活・文化	17
寄稿	里海文化圏としての瀬戸内 瀬戸内文化再発見のために 印南敏秀 よみがえる風景の輝き 西田正憲 瀬戸内漁民——生業と海の道 武田尚子 観光資源としての瀬戸内海島嶼 稲田道彦	26
連載	震災復興Report® コミュニティの再構築を目指す 岩手県陸前高田市「みんなの家」	33
連載	relay essay 私の好きなまち・暮らし® 光と風と土の匂いに満ちていたジョージ 高見澤たか子	37
	back number・information	38